

すでに五〇年代の『指輪物語』（評論社）に示されている。フロドの長い旅はモルドールの噴火口に邪悪な魔力を持つ指輪を投げ入れるためだった。ここには作者が身をもって体験した戦争の刻印が見られる。

六〇年代の『プリティン物語』（ロイド・アリゲザンダー 評論社）では少女エイロヌイは魔力を使うことに執着せず、望みのかなう魔法の指輪をふつうの指輪にしてしまう。また七〇年代のプロイスラーは悪としての魔法を人間としての愛と友情が解き放つというテーマを『クラバート』（偕成社）で描いている。

エンパワーメントとしての魔法

そして今、「魔法」はこの世界の困難な現実の中で、自分自身の存在の無力感、他者とのコミュニケーションの希薄さに向きあわなければならない子どもたち自身に向けて、強力なエンパワーメントともいえる意識的な手段として用いられるようになってきた。それはこれまでのファンタジーとはちょっと位相を異にする。ダイアナ・ヘンドリーが『魔法使いの卵』（徳間書店）の中で「人間はみんな魔法の遺伝子を持っている」と述べているのは、こうした現代の子どもたちへの励ましでもある。魔法そのものが一つのメタファーとして語られることも多い。「空を飛ぶ」ことは人間の原初からの願いであり、ピーター・パンとともにネバー・ラン

ドへ行ける子どもらしい夢の具現だったが、『真夜中の飛行』（リタ・マーフィー 小峰書店）では、一族の女たちだけが夜、空を飛べる家系に生まれた少女ジョージアが「飛ぶ」ことを、女性の自立というメタファーも含ませて描いている。

ル・グウィンの『ギフト 西のはての年代記Ⅰ』（河出書房新社）では、さまざまな「ギフト」が存在し受け継がれていく世界の中で、強い目の力というギフトを持った少年オレックが、父に目を封印される。このギフトは「天から与えられた才能」であり、聖書に語られるタラント（「タレント」の語源）の強力なものだろう。私たちはさまざまなタラントを与えられているが、それを自覚することなく生きていく。それをメタファーの形で物語化し、若い読者に自覚してもらおう（もちろん、空を飛ぶのであればワクワクする飛翔感、独自の能力を持つのであればその面白さをいかに描くかが前提ではあるが）。それがうまくいけば、すぐれた現代のファンタジーとなるだろう。

内なるコアハを磨く

子どもたちによく読まれているロアルド・ダールの作品では、まことに創意工夫に富んだユーモラスでグロテスクな手法が使われ、管理・抑圧する大人たちに向けて、子どもたちの魔力が大きな解放のエネルギートなる。またダイアナ・ウイン・ジョーンズの『魔女と暮らせば』（徳間書店）